Osaka University Knowledge Archive

Title	退渓と日本儒学 ： 退渓学と山崎闇斎の影響関係についての一考察
Author(s)	張, 源哲
Citation	懐徳堂研究. 2013, 4, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26934
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

退渓と日本儒学

—— 退渓学と山崎闇斎の影響関係についての一考察 ——

張源哲（チャン・ウォンチョル）

1　はじめに

朝鮮の李退渓の存在が日本に初めて知らされたのは恐らく彼の政治観や政治官僚としての姿であった。それは多少意外と思われるかも知れないが確かな事実である。初めて官職についた翌年である一五三四年六月に東萊というところまで日本人を護送する職責を担い、初めて日本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対日関係を如何に確立させるかは官僚として重要な課題であったに違いない。退渓が日本との関わりを具体的に整理された見方を表わすまでは約十年を待たなければならなかった。一五四四年四月、日本の船二十余隻が慶尚南道蛇梁鎮（サリャンジン）へ侵入した蛇梁之変の事後対策を通じて彼の対日観をみることができる。その事件は甲辰年に起きたので甲辰之変とも称される。朝鮮朝廷では当事件を契機に対馬島を経由して実行されていた日本との交易関係を断絶するのか否かについて激論が行われた。日本側の度重なる懇請もあったので結局一五四七年丁未條約によって交易を再開することになるが、その論争のなかで一五四五年七月退渓は「倭使を絶たないことを望む疏[1]」という上疏文を出し、対日関係において宥和策を取ることを強く主張したのである。

一五四五年六月日本国王が送った密使によって触発された当論争では対日関係を断絶すべきだという意見が朝廷の大半を占めていたが、退渓は対馬との正常化をはかり日本との交易を再開すべきだという宥和論の少数派の意見を維持していた。宥和論は退渓以前申光漢や李彦迪などによってすでに提起されたが、当時弘文館の典翰の職責にあった退渓がその上疏文を出した直後辞職した事

実から、彼が当問題について非常に真剣に考えていたことがうかがわれる。[2]

退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、彼の日本観は日本を文化的教養が欠如した「夷狄」と規定したいわゆる「王者不治夷狄論」の立場にあったのである。しかし日本との外交においてもっぱら武力というよりは権と勢を適切に活用することによって平和を維持する一方、日本に対して文化的教養に基づいた感化を行い、文明社会へ導くことが重要であると考えたのである。退渓の次の文書から察すれば、彼は対日関係の悪化が朝鮮に未曽有の災難を招くと予想したのではないかとも推測される。

「しかも現在の我が国は北の匈奴とも不和が絡まっているので、もしかすると暴悪無道な報復を企み我が辺境を侵す計画をたてる者がいるかも知れません。もし南と北の両夷狄が一度に侵入すると、東側を耐え忍ぶと西側が危険になり、腹を守れば背中が壊滅されてしまうかも知りません。将来我が国はその事態を如何に解決できるか大変心配でございます。[3]」

2　日本における退渓学の受容の前史

先述したように対日に関する官僚としての退渓の見解が当時日本に知らされたかどうかについては詳しく知る術がない。しかし官僚であり当代を代表する儒学者として退渓は当時日本が文化的教養のある文明社会へ進むために選ぶ道について何らかの方向を提示したといえる。以後日本社会が文化的教養を体得する一つの方法として儒学、特に朱子学を有力な方向として選択し、また朱子学を理解する方便として退渓の学問と思想を援用したという点で退渓の日本観は非常に象徴的なものであったと言えよう。

日本の儒学の受容と展開において退渓という象徴性は彼の弟子達によって具体化されていくのである。すなわち退渓の上疏があってから45年後、壬辰戦争（文禄・慶長の役）[4]が起きた直前、日本に派遣された最後の通信使一行に参加した金誠一と許筬は退渓の弟子であった。彼らは使行期間中京都で三十才余りの若い日本僧侶と交遊することになる。その若い僧侶は後日日本朱子学の鼻祖といわれる藤原惺窩であった。

特に惺窩と親しく交友した許筬は彼のために儒教と仏

教の異同について論じた「柴立子説」を書き渡した。惺窩はそれを契機に仏教から抜け出して儒学への転換したのである。のみならず以後日本儒学が進むべき方向転換の一契機にもなったのである。[5] その後藤原惺窩は壬辰戦争の時、日本に連行されてきた姜沆と学問的交流を通じて日本儒学史に名を残す儒学者として登場することになったことは周知のとおりであるが、その姜沆も退渓の門下であった。[6] しかし日本最初の儒学者として登場した惺窩の学風は、純粋な朱子学とはかけ離れていた。既に指摘されているように、惺窩の学問は朱子学だけでなく陽明学も受け入れており、さらに儒仏道三教の統合を主張した明末の異端的思想家であった林兆恩の影響も大きかったとも言われる。[7] したがって惺窩は退渓の著書や思想についてある程度理解していたし、その影響を受けたことは確かであるが、その範囲は限定的であったといわざるを得ない。

以上の文脈から考えれば、惺窩から朱子学を伝授されたといわれる林羅山の場合、惺窩よりはるかに朱子学一尊主義に傾いていたといえる。それは彼が惺窩の門下に入る前に、惺窩の学問が陸象山と陽明学に対して包容的であったことについて批判したことからもわかる。しかし惺窩の門下に入ってからやがて幕府の文教の責任者として活躍しつつ、江戸時代の儒教文化の基礎を固めたと評価される羅山の学風は朱子学の範囲にとどまることはなかった。江戸時代を通じて朝鮮から伝来された書籍[8]を最も多く読んだと評価されたことからもわかるように羅山は博学博識な学者であったし、彼の学問は中国・朝鮮・日本の史学と文学をはじめ本草学・兵学・神道学など多岐に渡っている。

儒学の全般にかけて幅広い知識を追求した羅山が自分の儒学として自分の学説を深化させるためにも退渓の影響をある程度受けたことは当然である。彼は退渓の『天命図説』などを研究して一六五一年の跋文を付けて出版した。また、その一連の過程を経て十六世紀朝鮮の儒学史で起きた理気前後の問題や四端七情論を囲む論争についても彼なりの意見をもつようになったのである。[9] 朝鮮通信使一行のために作った次の詩句をみると退渓と彼の学問に関する羅山の評価の一面をみることができる。

（日本に）使節にきた圃隠の労苦を慰めて
労如圃隠要須慰
理は将来退渓とともに窮究しようとするよ[10]
理与党退渓将共窮
退渓李氏は群れから聳え立っているので

退渓李氏抜群殊
貴国の儒学の名声は皆が讃える。[11]
貴国儒名世僉呼

朝鮮朱子学の飛鳥と評価される鄭夢周がかつて日本に使臣として来て大変苦労したことについて慰めたあと、退渓の学問的偉大性を述べている。羅山が退渓に対して如何に敬慕の念を抱いていたかがうかがえる。

以上でわかるように、江戸時代の日本儒学または朱子学の基礎を固めた惺窩と羅山の学問は両方とも朝鮮の儒学と密接な関連があった点で退渓との影響関係を想定できよう。しかし儒学者として退渓の偉大性を評価しつつも退渓の四端七情論に限って関心を寄せた林羅山のように退渓の影響は非常に限定的であったといわざるをえない。以降、退渓の学問と思想の影響が本格的に現れるのは山崎闇斎の登場を待たなければならなかった。

3　退渓学の受容と山崎闇斎の思惟の展開

周知のように修養主義的または、日本的な朱子学を確立した学者と評価される山崎闇斎が退渓を如何に敬慕し、退渓思想に如何に影響を受けた人物であったについては阿部吉雄の先駆的な研究[12]以来、多くの研究で指摘された通りである。退渓の学問は朱子の思想を徹底的に祖述する一方、内省的省察を通じて個人の修養に結びつけることによって窮極的に日常の生活に適用しようとしたのである。そして当時の他の日本儒学者には見られない闇斎の思想は個人の修養と厳格な行動規範を重視したのである。その点において二人の間の影響関係は最初から必然的であったといえるだろう。

闇斎は羅山と同じように、朱子学の一尊主義からさらに進んで朱子の著書を精密に研究することによって、元・明以来の朱子に関する誤った認識を正して、朱子が立教した原点に戻ることを強く主張した。闇斎は博学を追求した羅山の学風を俗学であると批判しつつ、朱子の思想の探求を通じて人間が生きていく道を求める道学こそ真の儒学であると主張したのである。[13]

朱子学の探求を通じて自分の思想的な観点を模索する闇斎は当時土佐藩の家老であり儒学者であった野中兼山の収集した書籍によって退渓の著書に接したのである。[14]闇斎の思想的に共感した野中兼山は朝鮮朱子学に関心があり、集書に力を注いだのである。闇斎はかつて惺窩や羅山が読まなかった『李退渓文集』や『自省録』のよう

な退渓の著述に野中兼山を通して接することができた。特に彼が全人未踏の業績であると評価した『朱子書節要』は闇斎だけではなく、彼の学風を受け継いだ崎門学派や後代の大塚退野に至るまで多大な影響を及ぼすことになったのである。[15]

ところで闇斎が自分の朱子学的思惟を完成させる過程で退渓著作との出会いによって体感した感動の程度やその実体が何であるかについては、彼が三十三才の時に編纂した『白鹿洞学規集註』の序文からもうかがわれる。

「当学規が明らかに整ったのはその通りであり、『小学』・『大学』の本を勉強しなければならない。だが朱夫子の文集中に埋もれていたので解かる者が少なかったが、かつて私がそれを引き出し書斎に掛けて心を沈めて深く思索したことがある。近頃李退渓の『自省録』を読んだが詳細に論じていた。彼が論じたことを繰り返してみると当学規の学規になる意義を理解することができた。[16]」

「ところで嘆かわしいのは日本では『小学』・『大学』の本が家で伝習されているが、その意味を十分に理解する者がいたとはまだ聞いていない。それは歳月の間隔が遠く、地理的に遠く離れていたためであろうか。それにしても朝鮮の李退渓は朱子より数百年後に生まれたにも関わらず白鹿洞書院で朱子から直接教えられたかのようであったので、私も須らく感発して興起しようと思う。[17]」

闇斎は『小学』と『大学』は本来不可分に連続されていたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴があると主張しつつ、「白鹿洞学規」こそ『小学』と『大学』を連続的に把握し学問の全体性を提示する著作であると高く評価した。その「白鹿洞学規」も『朱子文集』に埋もれてその意義を理解する人がいなかったが、自分がその価値を認識して、精読していく過程で退渓の『自省録』の助けをうけ「白鹿洞学規」の意義についてより深い内面的理解に至るようになったという。

また、闇斎は『小学』と『大学』は日本でもよく読まれていたが、その連続性については正しく理解する者がいなかったといいつつ、惺窩と羅山の学問の問題点についても暗に批判している。しかし空間的な制限のため文献を通して朱子の真義を理解することは不可能であると思った自分が退渓の著作との出会いで理解の可能性が与えられたので喜びを感じたのである。すなわち、闇斎は

自分も退渓のように現実的に朱子と遠く離れているが、専心専力で朱子の著作を読むならば、あたかも「白鹿洞書院で朱子の教えを直接受けるような境地」すなわち朱子と「洞遊面命」の世界に達することが出来ると悟り、発憤することになったというのである。

以上から退渓の著作が闇斎に与えた最も大きな影響とは、朱子から習う行為、すなわち古典を読むという行為自体の可能性を退渓の自らの実践を通じて見せてくれたことに他ならない。要するに闇斎が朱子を学び、朱子思想の真義に達するためには文献の精読と深い内面的理解という接近法が最も有効であったという事実を退渓の著作を通してはじめて知ることになったのである。したがって闇斎の学問的活動が主に退渓から習った方法論を援用し、朱子の膨大な著作や語録を読み、主題と課題別に精選・整理し、嘉点と称される訓点を付け刊行することは然るべきことであっただろう。

したがって闇斎が退渓を絶賛した例としてよく引用されるのは、膨大な『朱子文集』や『朱子語類』をすべて読破したのは李退渓だけであり、また退渓の超人的な努力の結果として出された『朱子書節要』こそ前人未踏の業績であることを強調したことである。要するに闇斎において退渓は朱子と「洞遊面命」することによって、言い換えれば朱子文献の精読と内面的な理解という方法論を用いることによってそのような業績を成し遂げることができたことを強調しようとしたのである。

「『朱子書節要』は李退渓の一生の努力がすべてここにある。『退渓文集』全四十九巻を読みましたが、実に朝鮮第一の人物であった。[18]」

「『朱子文集』と続集・別集全百二十一巻（中略）、『朱子語類』百四十巻（中略）、朱子の文書を抄出したことは多いが、まだ退渓の『朱子書節要』に比するものを見たことがない。（『朱子行状』は退渓により輯注されたが、それもまた思索したのが精密であった。[19]）」

闇斎の朱子学的な思惟の形成において退渓の著作とその方法論の意義は相当大きかったので、彼の思想の根底に及ぼした退渓思想の影響は幅と深さにおいても絶対的であったと予想するのは無理でもない。[20] しかしその推論にはある程度の制限を付け加えなければならない。二人の間の影響関係が想定されても、彼らの学問の基本的性格が朱子を如何に理解するかにあったので、先述したよ

うに影響の範囲が主に方法論に集中された。そのため闇斎が退渓思想を濾過なしに直接受け入れたような影響関係はそれほど見当たらない。二人において全ては朱子がすでに提示したことであり、それを如何に祖述して継承するかが最も重要な課題であったためである。

したがって闇斎が退渓の著作に深く共感し、彼の思想の形成に大きな影響を及ぼしたとしても二人の思想の展開方式には相当な異質性が存在していたのである。例えば闇斎朱子学の核心であるといわれる敬に関する理解においても退渓のそれとは相当な差異が見られる。

朱子学でいう敬について簡単に述べると、主体が外部の物事との関わりにおいて主体性を喪失されないために心を絶えず覚醒させていく行為をいう。ところで敬の勉強においてまず主体としての心を確立させてから、その心が身を主宰すべきで、言いかえれば敬身が敬心に従属されると理解されてきた。しかし闇斎はそれとは逆に敬心よりも敬身の側面、要するに身を正しくするのが内心を確立することであると説いたのである。いわゆる心身が相即するところで心の主体性を確立すべきだと主張している。敬に関する闇斎の独自的な理解は退渓とは根本的に異なる。それについては既に先行研究でよく指摘されている通りである。

「退渓が敬の身体的な側面を内面の心を養う一つの条件として、あるいは身体が心に服従することは当然のことで、朱子の「心は身の主人」という命題に基づいてより一層強調する方向に進めたが、一方闇斎はそれとは逆に倫理的行為の始発点になる身体の行動をより重んじて「敬心」はそれを達成するための過程・手段として把握したのである。[21]」

退渓は全てを内面の心への吸い上げていく求心的な思考法を追求したが、闇斎は逆に外側の世界に向かって発散していく遠心的な思惟を志向したといえる。言い換えれば敬を守る目的が一身に揃えている五倫を明らかにするためであるという闇斎の主張に示されているように、退渓が主張した内面に向けて存在の内的構造を自覚するために使われた敬の勉強内容が、闇斎においては他人との関係に表れる倫理の構造を明らかにするためへと変わっていることが分かる。

以上のように二人の思考法の隔たりを示すもう一つの例として、『小学』と『心経』に関する評価が挙げられる。周知のように退渓は身体の行動規範を主に教える『小学』において心の存在方式が主に論じられている『心境』を高く評価して、初学者用の学習書としての『小学』より

は『心境』を優先視している。しかし闇斎は、退渓の以上の評価に関して次のような対立的な意見を提示している。

「程復心の「心学図」について、退渓は「答趙士敬書」で詳しく論じて賞賛している。その文書で曰く「これは程隠翁が四五十年間の隠遁生活で潜心して得られたもので、一朝に軽率に立論して攻撃しても論破し難いだろう」といった。私が考えるに退渓の賞賛は褒めすぎたように思われる。[22]」

以上の例でわかるように闇斎が誰よりも退渓を敬慕し、その影響を大きく受けたことは事実であるが、一方批判や疑問を隠したまま退渓の一言一句をそのまま遵守したとはいえない。先述した『心境』の評価に関しても同じように、明の儒学者であった韓苑洛が朱子の周易研究に対する疑問を提起したことを批判するとともに、韓苑洛の主張を肯定的に評価した退渓の見解を闇斎は批判している。次の言説は闇斎が退渓に対して如何に批判的な距離を維持していたかを物語っている。

「私は思う、退渓の四爻・五爻の変に関する疑問が韓苑洛の見解と類似していることは退渓の考察が詳細でないためである。[23]」

一方では退渓の方法論に影響されながらも、他の一方では退渓学説の不備な点を分析的に批判する闇斎の態度は、退渓の影響を無条件に受け入れるのでなく批判的に継承していることがうかがわれる。それは退渓と闇斎の影響関係は一直線上に連携せられるのではなく、重層的かつ複合的であったことを示唆している。その結果、以後闇斎学派に至り退渓に傾倒する肯定的態度は佐藤直方[24]に、退渓を批判する否定的認識の態度は浅見絅斎に受け繋がれる。その後崎門学派の内部で退渓の学説と影響に関する様々な議論と葛藤の端緒を与える契機になる。それについての詳細な論述は省略する。

4　退渓学の批判的継承と変容様相

先述したように、惺窩や羅山などの少数の儒学者によって断片的に読まれた退渓の著作はやがて闇斎に至り日本儒学者の本格的な研究対象になり、日本朱子学の形成に大きな影響を与えたことがわかる。以後も日本の知識人学者の間で退渓の著作が広く読まれたという事実

は、一七一九年朝鮮通信使一行の中で製述官であった申維翰の紀行録である『海遊録』からも確認することができる。

「大坂に書籍が多いことは実に天下の壮観であった。我が国の名賢達の文集の中で日本人が崇め立てるのは『退渓集』に比するものはない。家ごとに習い覚える。日本の学者たちとの筆談においても彼らが尋ねたのは『退渓集』の文句であった。質問のなかでも「陶山書院はどの郡に属するのか、先生の子孫は何人があり、何の官職についているか、先生は生前に何が好みであったか。」など一々記録するすべもないほどであった。[25]」

そのように当時日本では朝鮮書籍の出版と販売が盛んであったが、その中でも知識人社会では特に退渓と『退渓集』に異様なほど関心が高かった事実に注目すべきである。従って日本の学者が朝鮮通信使一行を訪問して筆談を交わす場合、当然『退渓集』の内容や退渓およびその子孫の近況についての質問が慣例のようであったという。例えば申維翰との筆談を交わした日本の儒学者水足安直は陶山書院について尋ねたのである。[26]

ところで、朝鮮と日本の儒学者の間での議論で最も注目されるのは、当時より早い時期、一七一一年の第八次使行時期であった。当時日本の有名な文人や学者が多く交流に参加したので、両国の文化と学問に関する様々な議論が行われた。特に両国の朱子学に関する論争が多く行われた点に注目される。[27]例えば日本側の代表的な文人として活躍していた筑前博多の儒官であった春菴の次の発言は当時日本の儒学者たちが朝鮮朱子学の展開と成果について相当知識を持っていたことと、朱子学の学脈が東に移ったという「道脈已東」の発言から朝鮮朱子学を高く評価していたことを物語っている。

「嘗て私は退渓先生の本を読んで彼が純粋で真な儒者であることを知るようになって敬い賛嘆することがより一層深くなりました。その他、陽村、晦斎など諸先生の本も読み、その人柄を知るようになりました。さらに彼らを引き継ぐ学者たちがいたことも知りました。それによって濂洛の学脈がすでに東の方へ移ったことが分かります。[28]」

しかし当時、両国の学者の間で朱子学に関して行われた議論で最も注目されるのは日本儒学者の主張に朝鮮朱

子学に対する密かな対決意識があったという事実である。日本の朱子学も朝鮮に劣らないほど学者と著書があることを見せかけようとしたり、朝鮮の儒学と儒学者について密やかに批判的な論調を出したりもしたのである。

両国の対決意識を最も鮮明に表したのは日本側の儒学者である三宅観瀾であった。彼は他ならぬ闇斎の弟子の浅見絅斎から学問を習った朱子学者であった[29]。専ら経義を議論し、古今を推し量る人物として評価された当時の代表的な朱子学者であった三宅観瀾も退渓の学問的偉大性について惜しみなく賞賛の論調で述べている。

「その後、遼東の東方に李退渓がいた。退渓はひたすら朱氏を崇めたてていた。かつて私は彼の著書一・二冊を読んだことがある。それによると四端七情を分弁して、さらに拡充、抑制する方法が一層明確になった。また自ら仁の実行を教え、自己の克服や治める功力を体認することがより切実になった。そして性命の微言や章句の序論が奥深く、精密で自分の学問を自慢することなく、拙速で行うこともない。さらに素直に達する望みを窮究して、やがて卑近なところに進んだことはあってもすぐ本道に戻り、礼を動かして義を実行するに至ったのである。[30]」

しかし三宅観瀾に注目すべきことは、退渓に関する表面的な賞賛の論調とは異なり、山崎闇斎齋を退渓の影響を受けた追従者ではなく、退渓と肩を並べるほどの日本の真の儒学者として浮彫りにしようとした点である。彼は闇斎学問の源が退渓にあったという二人の間の影響関係や関連事実については全く言及しなかったのである。かえって観瀾は退渓と闇斎が空間的に遠く離れていたにもかかわらず、相互に照応するように朝鮮と日本で偉大な学問的業績を成就した事実を重ねて強調したのである。その結果、両国では二人の賢人の後を継ぐ学者が多く存在していることを指摘することによって、退渓と闇斎が相互影響なく対等な位置にある偉大な学者であることを浮彫りにしようとする彼自身の裏面的意図を明確に表している。さらに、闇斎から自分の師匠であった浅見絅斎へと受け継がれている退渓に対する批判的な論調を繰り返し提起して彼自身の隠れた意図を補強しようとしたのである。

しかし観瀾の朝鮮朱子学に対する以上のような対決意識、すなわち退渓に対する批判的疑問の提起と山崎闇斎を退渓と肩を並べるほどの真の儒学者として尊崇しよう

とする試みは、最初の意図に比してそれほど成果をあげたとは言い難い。それは日本の儒学者たちの朝鮮朱子学についての広博な知識とは対照的に、朝鮮の儒学者たちは闇斎をはじめ日本の朱子学についての知識は殆どなかったからである。観瀾の論争相手として参加した朝鮮通信使の書記であった厳漢重の談話は、当時日本朱子学の状況について全く無知であった朝鮮側の状況を垣間見ることができる。

「仰せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が堂々と起きているから名儒が排出され斯道を立て直すべきでしょう。ところで山崎氏のような学者に至り、貴方がおっしゃったとおり、墳典の貫通と義理の探求は誠に好学君子と称えるに値するでしょう。しかし、国が既に分かれて便りが届かないので、異邦の人には盛大な名声を聞けなくなることははなはだ恨めしいゆえであります。[31]」

要するに、一七一一年第八次朝鮮通信使の使行を契機として行われた両国の文人学者達の朱子学に関する論争は相互の認識の差と双方の知識の不均衡のため成果なしで終結してしまったのである。その状況について観瀾は次のように自分の苦情を吐露している。

「私は我が国の文士の中で毎度山崎氏を代表として取り上げるのは、晦斎と退渓の気風を習っている学者たちに別の時代、別の国においても彼らと同調して志趣を共にする者がいた事実を知らせたくて、貴方に伝え願いするつもりです。[32]」

朝鮮通信使の使行を契機に両国の文人学者たちの間で行われた朱子学に関する議論が第八次使行以後には見当たらない。それとともに退渓と闇斎の学問的な関連性についての論争も見られなくなる。

しかし当時両国の朱子学を囲んで十八世紀以後日本での議論は退渓と闇斎の影響関係に関する既存の同質性の強調から次第に異質性を浮彫りにする方向へ進んだのである。さらに両者を対立的または対等な存在であると認識しようとする新しい傾向が現れ始めたという事実を明らかに確認できたのは一つの成果であるといえよう。

従って退渓と闇斎の学問的継承様相に関する観点の変化とその展開様相についての具体的な究明は、退渓と闇斎の影響関係はもちろん、それを越えて朝鮮朱子学と日本朱子学の相対的特性を比較的に把握するためにも最も

重要な学問的課題であることを改めて認識する必要があるだろう。

5　結び

以上の議論に基づいて結論をいうならば、退渓と闇斎の影響関係は単線的な分析視点で見つめるのではなく、より重層的かつ複合的に接近する必要があるだろう。文献の精読と内面的な理解という方法論上の課題をはじめ、敬思想の継承に至るまで闇斎は退渓思想を直線的に継承したのではなく、徹底的に自分の方式をもって変容・発展させたのである。

従って闇斎朱子学の中核といわれる敬思想において退渓の敬思想を如何に変容・発展させたかを検討する必要がある。要するに退渓は朱子の修養論で展開される居敬と窮理の二つの方法の中から居敬への焦点を合わせ徹底的に内面的修養を展開したのである。山崎闇斎からもわかるように、退渓を通して受容された日本の朱子学は、修養論の方向ではなく、社会的な実践の方向への発展であった[33]。それは山崎闇斎が退渓の敬哲学を受容しつつもそれを心性の内面の問題でなく、五倫の問題、すなわち他人に対する倫理的関係へと変容させたことからもうかがわれる。闇斎をはじめ日本朱子学の関心が、個人の修養が中心であった朝鮮の朱子学とは異なり、社会哲学の樹立を指向する傾向があったといえる。

このように日本朱子学の傾向は形而上学を否定する方向へと発展することになり、反形而上学的な傾向の日本朱子学はやがて朱子学を批判し、古学に戻ろうという古学派運動が出現する主な背景として作用したのである。以上の文脈からみると反朱子学といわれる日本の古学は、表面的には朱子学を批判したといっても裏面的には日本朱子学のもう一つの姿であったのである。今後日本朱子学の裏面を改めて吟味する必要があるのではないだろうか。

注

（1）李滉、『退溪集』、巻六、七－a、「甲辰乞勿絶倭使疏」（ソウル：民族文化推進會、一九九〇、影印本）、頁一六九。

（2）安炳周、「退溪の日本觀とその展開」、『退溪學報』（ソウル、退溪學研究院、一九八二）第三六輯

（3）李滉、『退溪集』、前掲書。「此国家已與北虜構釁 安知彼中不有諸酋之桀驁 切齒報復 而謀犯邊守者乎 設使南北二虜 一時俱發 則樽東而西掀 衛腹而背潰 未識国家將何所恃而能辨此乎 此臣之所大憂也」

（4）一六世紀末、東アジアの国際戦争であった当戦争に対して、韓国では主に「壬辰倭乱」、日本では「文禄慶長の役」、中国では「万暦朝鮮之役」などの用語が慣例的に使われてきた。しかし最近韓国では、高校用の東アジア歴史教科書の編纂とともに用語の妥当性に対する再検討が活発に行われた結果、より客観的かつ世界史的な視野で通用可能な用語として「壬辰戦争（The Imjin War）」を採択する傾向が増えている。

（5）阿部吉雄、『退溪と日本儒學』（ソウル：傳統斗　現代、二〇〇一）、頁一〇三。

（6）林羅山、『林羅山文集』巻四〇、「惺窩先生行狀」（東京：ぺりかん社　一九七九、影印本）、頁四六三。二人の出会いを記した次の記事がある。

「朝鮮刑部員外郎姜沆來在赤松氏家　沆見先生　而喜日本国有斯人　俱談有日矣　沆曰　朝鮮国三百年以來　有如此人　吾未之聞也　吾不幸雖落于日本　而遇斯人　亦大幸乎」

（7）成海俊、「日本朱子學の傳來と受容」、『南冥學研究』（晋州：慶尚大學校　南冥學研究所、二〇〇三）、第十五輯。

（8）例えば、当時朝鮮に伝来された書籍としては權近の『入學圖說』が一六三三年、退溪の『聖學十圖』が一六五五年、『朱子書節要』が一六五六年、『自省録』が一六五九年、『心經附註』が一六四七年、『延平問答』が一六四七年、『朱子行狀』が一六六五年、『夙興夜寐箴』が一六六六年に出版されている。また、李珥の『擊蒙要訣』も一六五八年に飜刻・出版された。

（9）林羅山、『林羅山文集』巻十四、「寄朝鮮国副使姜弘重」（東京：ぺりかん社　一九七九、影印本）、頁一五七－一五八。林羅山が退溪と奇大升の四端七情論争を評する次の記録がある。

「貴国先儒退溪李滉　專依程朱子說作四端七情分理氣辯而答奇大升　其意謂四端出於理　七情出於氣　此乃朱子所云四端理之發　七情氣之發也　末學膚淺　豈容喙于其間哉　退溪辯尤可嘉也　我曾見其答　未見其問　是以思之　其分理氣　則曰　太極理也　陰陽氣也　而不能答合一　則其弊至於支離歟　合理氣　則曰　理者氣之條理也　氣者理之運用也　而不擇善惡　則其弊至於蕩莽歟　方寸之內　所當明辨也　大升所問果如何」

（10）阿部吉雄、前掲書、頁一〇九から再引用

（11）阿部吉雄、前掲書

（12）阿部吉雄、『日本朱子學と朝鮮』（東京：東京大學出版會、一九六五）

（13）成海俊、前掲書、頁三二七参照。

（14）田尻祐一郎、『山崎闇齋』（ソウル：成均館大學校　出版部、二〇〇六）、頁一八六。

（15）『朱子書節要』は、一六五六年京都で飜刻・出版され、以後、一六七一年再び闇齋の弟子である黒岩慈庵が序文をつけ再版された。

（16）田尻祐一郎、前掲書、頁一八七から再引用。

「夫規之明備如此 宜與小大之書竝行 然隱於夫子文集之中 知者鮮矣 嘉嘗表出揭諸齋 潛心玩索焉 近看李退溪自省録論之詳矣 得是論 反復之 有以知此規之所以爲規者」

(17) 田尻祐一郎、前掲書 再引用

「且嘆我国小大之書 家傳人誦 而能明之者 蓋未聞其人 是世遠地去之由乎 雖然若退溪 生於朝鮮數百年之後 而無異於洞遊面命 則我亦可感發而興起云」

(18) 田尻祐一郎、前掲書、頁一九二を再引用。

「朱子書節要 李退溪平生精力盡在此矣 退溪文集全四十九卷 予閲之 實朝鮮一人也」

(19) 田尻祐一郎、前掲書。再引用。

「朱子文集續集別集凡百二十一卷……語類凡百四十卷……抄出朱書者多焉 未見若退溪節要者（朱子行狀 退溪輯注 尤考索尤精矣）」

(20) 例えば、彼の年譜によると、六五歳頃闇齋が退溪を朱子以後の薛瑄と丘濬とともに最も注目された学者として、次のように評価している。

「朱夫子之後知道者 薛文靖丘瓊山李退溪也 文靖見識之高 文莊博文之富 朱門之後無有出其右者 其後特李退溪而已矣」

(21) 嚴錫仁、「山崎闇齋の敬言説」、『日本思想』（ソウル：韓国日本思想史學會、二〇〇一）、第三輯、頁二一。

(22) 田尻祐一郎、前掲書、頁二〇〇 再引用。

「程復心心學圖 退溪尤稱賞之 答趙士敬書論之詳矣 其言云 此是程隱翁 四五十年林下潛心所得 恐難以一朝率然立論所能攻破也 嘉謂李氏所稱 恐過矣」

(23) 田尻祐一郎、前掲書。頁二一〇 再引用。

「嘉謂 退溪四爻五爻變之疑 與韓見相類者 考之不詳也」

(24) 佐藤直方の退溪についての評価は彼の『韞藏録討論筆記』に見られるが、彼の弟子である稲葉迂齋に道学の方針を論じた「冬至文」で「朝鮮の李退溪以降道學の責任を負う人がいたとは聞いたことがない（朝鮮李退溪之後欲負荷此道 吾未聞其人焉）」と退溪を極讃したことからも退溪を尊崇する彼の態度を見ることができる。

(25) 申維翰、『海遊録』、樂宗己亥十一月四日壬申の條。

「大坂書籍之盛 實爲天下壯觀 我国諸賢文集中 倭人之所尊尚者 無如退溪集 卽家誦而戶誦之 諸生輩筆談問目 必以退溪集中語爲第一義 有問陶山書院之屬何郡 又曰先生後孫 今有幾人作何官 又問先生生時所嗜好 其言甚多 不可儘記」

(26) それについては、水足安直の『航海獻酬録』の記録がある。

「僕嘗讀退溪李氏陶山記 已知陶山山水之流峙不凡之境也 聞陶山卽靈芝之一支也 今八道中屬何郡 陶山書堂隴雲精舍等 尚有遺蹤耶」

(27) 李慧淳、『朝鮮通信使の文學』（ソウル：梨花女子大學出版部、一九九六）、頁一七三－一八一。

(28) 瀨尾維賢編、『鷄林唱和集』巻十四、「謹問」(日本：松柏堂、一七一二)、頁三七

「僕嘗讀退溪先生書 知其爲粹美之眞儒 敬服尤深 其他如陽村晦齋等諸先生 亦已見其書 而知其爲人 且聞爾後繼作不乏其人 可識濂洛學脉已東矣」

(29) 原念齋、『先哲叢談』(東京：平凡社、一九九四)、頁二六八－二七五參照。

(30) 三宅觀瀾 外、『七家唱和集』宅集、「送嚴書記序」(日本：刊寫者未詳、一七一二)、頁一四。

「其後遼之東有退溪 李子專尚朱氏 嘗規所著一二 或辨四端七情者 擴充制抑之方 因之益判 或指己爲仁者 體認克治之功 因之彌切 而凡性命微言章句緒論 潛深縝密 莫衒莫速 循循然窮其所到 終乃就卑反內 禮動而義行」

(31) 三宅觀瀾 外、前掲書、頁二二に載せられた嚴漢重、「復觀瀾書」

「仰惟貴邦從尚丕變 文敎蔚興 宜其名儒輩出 扶植斯道 而至爲山崎氏 以足下所云論之 則盖亦淹貫墳典 探賾義理 眞可謂好學君子 而疆域既分 聲聞不逮 獨使異邦之人 不聞盛名 甚可恨也」

(32) 三宅觀瀾 外、前掲書、「與嚴書記副帖」、頁一七。

「僕於我邦多士之中 每推山崎氏爲稱首 意願託足下齋致此言 使學晦齋退溪風者 知異代殊域 亦未嘗無同調共趣之人」

(33) 李基東、「退溪學と日本の朱子學」、『韓国思想史學』(ソウル：韓国思想史學會、一九九五) 第七輯。